

「明るい夜」はうしろめたい

牧師 山本 護



毎週月曜日の夕刻に集会所でおこなわれている山梨ダルクのNAミーティング。NAが終わってメンバーを見送り、薬物依存症に苦しめられた彼らのリアルを自らの内に探した。照明が煌々と灯る集会所にたたずむと、ふいにうしろめたいような感じがしました。

礼拝堂を建て、作業小屋を集会所にリノベーションする時、「非電化」を実践したら教会の先進的

な手本になる、と夢見た。それと共に、微生物を最大限に利用する「コンポストトイレ」は環境負荷がもっとも少ない、と提案しました。

非電化とコンポストトイレ構想を根気強く訴え、丁寧に説得していけば、それが実現したかもしれません。ただその一方で、伝道所全体の調和を考慮し、試みも度が過ぎると「御心」を踏み外してしまうかもしれないという自戒もあって、使い勝手を優先する話し合いの流れに従いました。

「明るい夜」はうしろめたい。原発事故で故郷を追われた者への共苦からでしょうか。そうかもしれない。処理不可能な核廃棄物を増やし続けながら、そのツケを未来に負わせているからでしょうか。そうかもしれない。かつて非電化まで夢見たのに、伝道所の現状は電力消費が増えていることでしょうか。そうかもしれない。うしろめたさの理由を探してみると、窪地に溜まった枯葉のように似た色あいが分厚く重なり合っている。

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した(マルコ 6:41～42)」。イエスによる少ない食物の分かち合いは、神による被造物の調和を讃える祈りではないのか。「そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人だった(6:43～44)」。

神の恵みは、これほど余裕をもって与えられているのに、いつの時代にも、どの世界にも空腹を抱えた人や故郷を追われる人がいます。今の日本においては、明るい夜のうしろめたさが現実をつきつけて来ます。そのうしろめたさが、イエスの祈りとふるまいに現われた自然の調和に立ち戻らせてくれます。Ω